

食荔支二首 并引

荔支を食す二首 並びに引

紹聖三年（一〇九六）、六十一歳、惠州での作。

惠州太守東堂，祠故相陳文惠公。堂下有公手植荔支一株，郡人謂之將軍樹。今歳大熟，賞啖之餘，下逮吏卒。其高不可致者，縱猿取之。

惠州の太守の東堂に、故の相陳文惠公を祠る。堂下に公の手植の荔支一株有り、郡の人は之を將軍樹と謂えり。今歳大いに熟す。賞啖の余、下は吏卒に逮ぶ。其の高うして致す可らざる者は、猿を縦つて之を取らしむ。

【語釈】○陳文惠公：陳堯佐、あざなは希元。仁宗の世に参知政事（副総理）となった。一時この惠州の知事の代理をしたことがあるという。○郡人：郡は惠州をさす。○將軍樹：荔支の品種の名。○大熟：たいへん多くみをつた。○下逮吏卒：逮は及ぶ義。吏は下級官吏、卒は用務員。従卒。蘇軾はほんとうの官吏でなく罪人であるが、かれにも分け与えられたことをいうのであろう。

【解釈】惠州の知事官舎の東の広間には、副宰相であった陳堯佐氏をまつてある。その軒下に陳氏が手ずから植えた一本の荔支の木があつて、土地の人は將軍樹とよんでいる。今年の実がよくなつたので、まず知事が賞味され、のこりは下役や小使にまで分けられた。高いこずえの手がとどかない処のは、猿に自由に食わせるのである。

其二

羅浮山下四時春

羅浮の山下 四時 春のごとし

盧橘楊梅次第新

盧橘 楊梅 次第に新たなり

日啖荔支三百顆

ひび 日々に 荔支を啖うこと 三百顆

不妨長作嶺南人

妨げず 長えに嶺南の人と作ることを

【語釈】○羅浮山：惠州の西北にある山。○盧橘：漢代の賦などに見える果実。日本の枇杷。○楊梅：やまもも。○次第新：次々に新しいものが絶えない。○日啖：毎日たべる。○顆：果物など円形の物を数える助数詞。

【語釈】ここは羅浮山のふもと、一年じゅう春みたいな気候だ。びわ、それからやまももと次々に新しい果物が出てくる。毎日毎日、れいしを（王猷之ではないが）三百個ずつでも食べられる。こうして死ぬまで嶺南の住民となり終つても、私は不平は言えない。